

■立川の養蚕

立川の養蚕は、江戸時代中頃から盛んになり、昭和の初めころまでは、農業の中心を占めていました。養蚕が行われる春から秋まで、農家の生活は、蚕を中心に営まれました。家の造りも、「^{さんしつづく}蚕室造り」と呼ばれるものに改造されました。



はきたて 卵からかえった蚕を鳥の羽で蚕座紙(さんざし)の上に移します。

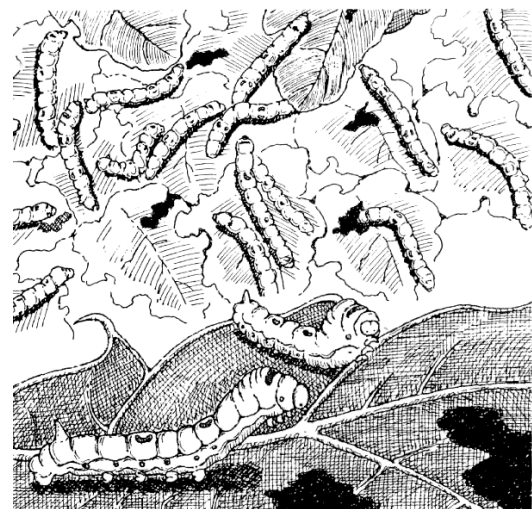
砂川地区では、万延元年(1860)に蚕の神様である「^{こかげじんじや}蚕影神社」が祀られており、当時養蚕が盛んに行われていたことがわかります。また、小正月のマユ玉飾りなど、養蚕に関係した年中行事が、かつてはどの農家でも行われていました。



桑くれ(給桑) 蚕には新鮮な桑の葉を与えなければなりません。



桑の葉つみ

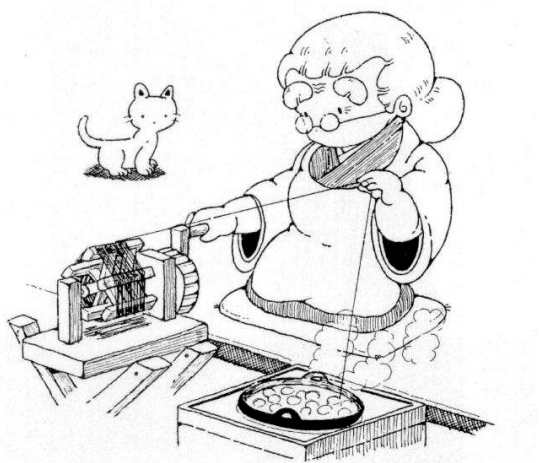


桑の葉を食べる蚕

蚕は桑の葉を食べる時期と眠る時期を4回繰り返します。

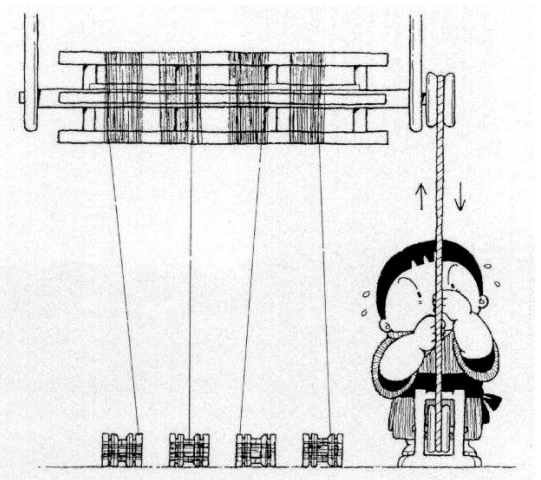


上^{じょうぞく} 成長した蚕は族^{まぶし}の中で絹糸を吐いてマユをつくる。



糸引き

マユ煮なべで煮たマユから糸を出し、座繰りを回し糸枠に巻く。



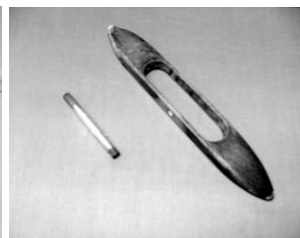
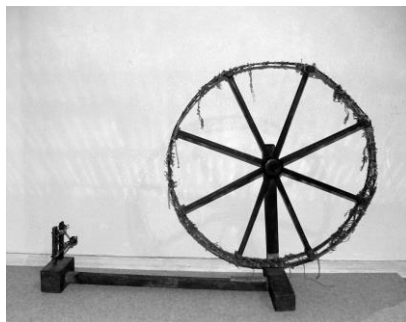
糸あげ

糸枠に巻いた糸をあげ枠にとる。

■機織り(はたおり)

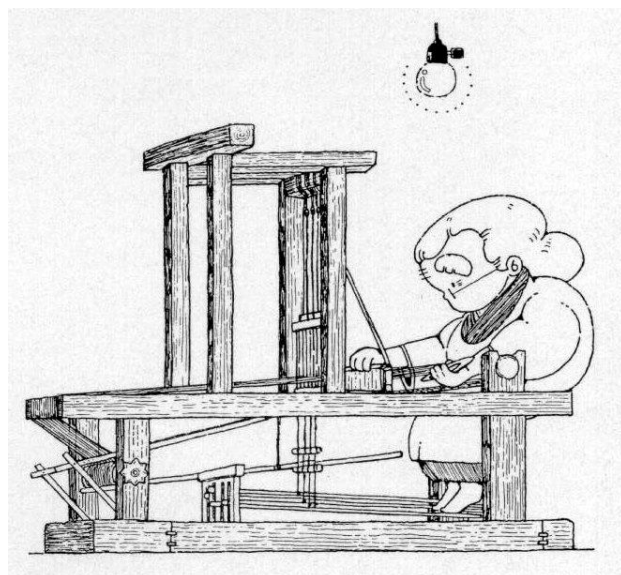
機織りは女性の仕事であり、農家の副業として行われていました。砂川地区では江戸時代末期から、「砂川太織り」が織られていましたが、^{すながわふと お}明治時代になると、村山地方の「村山がすり」の影響を受け、生産の中心は砂川太織りから村山がすりに移りました。

その後の道具の改良によって、機織はますます盛んになりました。明治 22 年に砂川村で行った調査によれば、村内の農家の 85%にあたる 500 戸で、機織が行われていました。



左:管^{くだ} 右:杼^ひ

糸車^よ 撚った糸をこの道具にかけ、管^{くだ}に巻き取る。
管は杼^ひに入れ、布を織る時に使う。



機織り

緯管^{よこくだ}を杼^ひに入れ、経糸^{たていと}の間を通し、箆^{おき}で布をしめて織る。